
目に見えぬ世界の少年

時雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目に見えぬ世界の少年

【Nコード】

N7910E

【作者名】

時雪崩

【あらすじ】

何事も無い高校生活。いきなり降り出した雨。そのときに雅也には悪の手が近づいていた。自分がまだ何者かわからない雅也とその真実を見つける旅が始まる。

第1章 第1話 雅也と風魔

―近づいている―

―お前はまだ自分自身をよく知ってない―

―時は戻らない―

―そしておまえはもう戻れない―

僕の頭にふと声が流れてきた。

「何だ。今のは？」

机に頭を伏せて寝ていた雅也まこやは黒板に目をやった。

教壇では数学の教師が数式を教えていた。

楽しくないな・・・

雅也は窓のほうを向いた。

相変わらずの雲ひとつ無い空。蝉の鳴き声。小鳥のさえずり。良い日だ。

「はあ早く帰りたいな。もうすぐ夏休みかあ」

―今、時が変わる―

―今から迎えに行くぞ―

アビリティ・オブ・アイ

―目の力を持ちし者―

「おい雅也、誰が寝取る。起きてこの問題を10分以内で解け！！」

雅也は嫌々ながら立ち上がり黒板に向かった。

女子がこそそと話している。

3分後、黒板には答えの数式が並んでいた。

「うっもう席に戻って良いぞ」

雅也は何事も無かったように、席に戻った。

そして、また惰眠した。

「雅也君って頭良いよね」

「うん、顔も良いし、運動神経も良いしね」

「オールマイティって雅也君のためにあるようなものよね」

女子が雅也のことをひそひそと話していた。

雅也は女子から人気があるようだ。

雅也は恋とかには興味は無いらしいが・・・

—さあもう着くぞ—

ザーザーという音とともに雨が降り出した。

教室の中に雨が入り込んできている。

1の2の生徒は急いで窓を閉め始めた。

雅也は雨の事は気付いていないみたいだった。

隣の席の女子が雅也の近くの窓を閉めてやった。

雷も鳴り始めたした。

変な感触だった。

ビチョビチョに制服が濡れていたからだ。

だがそれだけではなかったみたいだ。

これは水じゃない。何だ。この俺の体にまとわりつく変な水は。

誰かが指でパチンと鳴らした。

その時雅也にまとわり付いていた水が消えていった。

教室の扉から一人の男が入ってきた。

「見つけた。アビリティ・オブ・アイ」

男はニヤツと笑った。

教室がざわめく。

だが雅也はまだ起きない。

教師が「だれだ君は。ここは私立の中でも1位、2位を争うほどの学力の字曜高校だとして入ってきたのか」

男は何も言わず教師の前に立った。
そして、にやと笑った。

「俺か。俺はな。おしえるわけがないだろ」
いきなり教師の体を1本の刀が貫いた。
教師はゆっくり倒れこんだ。
少し沈黙が入った。

「キヤー」
女子は驚いて、騒ぎ始めた。

雅也は女子の騒ぎ声で目が覚めかけた。
雅也が完全に目を覚ましたとき、教室は屍の山と血の赤が目を通して頭の中に記録された。

「どうなってるんだ。これは」

雅也は目の前の現実に気分が悪くなった。

「教えてやろうか」

笑い声とともに雅也の後ろから声が聞こえる。

雅也はさつと後ろを振り向く。

だが誰もいない。

「こつちだよ」

また笑い声とともに後ろから声が聞こえた。

雅也はまたすぐに振り向いたがやはり誰もいない。

「誰なんだ。姿を見せろ」

「くくく、良いだろう」

雅也の前に、腰に刀をさした20代くらいのおっさんが姿を現した。

「殺したのはお前か」

男はニヤツと笑った。

「ああそうだ」

男はゆっくり歩き出した。

「君が何故殺されないかわかるかい」

男が問いかけた。

「知らない」

雅也は男の目を見て言った。

「教えてあげよう。知らずに死ぬのは嫌だろうからな」

男は今までに無いくらいにやつと笑った。

「君のその目。それは、アビリティ・オブ・アイというものなんだ」

「アビリティ・オブ・アイ？」

男は刀を抜いた。

そして、雅也の目の下に刀を近づけた。

「その目は、とても値打ちのある特別な目なんだ」

「特別な目？」

男が続きを話そうとしたとき

「それくらいにしたらどうだ」

どこからか声が聞こえてきた。

「正義のヒーローは遅れて登場するもんだぜ」

雅也の横にグラサンをかけた兄ちゃんみたいな人がいた。

「わぁ、いつ来たんだ」

「えっ、今普通に風に乗って」

（何言ってるんだこのグラサン）

「グラサンじゃない。風魔だ」
ふうま

（今この人心を読んだ）

「ああ心を読んださ。これがアビリティ・オブ・アイだ」

「おいそこの2人俺を忘れていないか」

男の額には血管が浮かび上がっていた。

「俺無視嫌いなんだよね。特に年下とかには。だから死んでよね」

男は刀を雅也から離し、風魔にむかって刀を構えた。

「はぁこんな弱いやつは相手にしたくないんだが」

雅也は瞬きをすると、隣にいた風魔は消えていた。

また雅也が瞬きをすると隣に風魔が手袋を外していた。

男は自分が持っていた刀を腹を貫通し、死んでいた。

「まったく弱いやつほど、よく吠えるもんだ」

風魔は男の右手の中指にさしていた指輪を抜き取った。

雅也は男の死体をよく見ていると、全身の力が抜け、そのまま気を失って倒れこんだ。

「まったく大変だぜ。まだまだ先は長いって言うのに・・・」

風魔は雅也を抱え込んで、風の音と共に消えていった。

第2話 3つの秘密

屍の山。赤い血。刀。風魔。

雅也の頭の夢にはそれしか思い出せない。

雅也は眠りから覚めだした。

「うっここは」

雅也は周りを見渡す。

周りには、ドラム缶と汚いソファがあるだけ。

「ここは工場か」

何か忘れているような気がする。

そうだ風魔だ。

雅也はさらに辺りを見渡す。

だがやはりいない。

「くそどこにいったんだ」

「ここにいるぞ」

真後ろから風魔の声が聞こえる。

雅也は後ろを振り向くと、片手にスーパーのビニール袋を持った

風魔がいた。

「おはよう雅也君」

にこやかな笑顔は体をゾクつとさせるものだった。

雅也は風魔から離れた。

なぜかというと、風魔は敵か味方かわからない奴だからだ。

「お前は何者なんだ」

雅也は問いかける。

風魔は歩いて汚いソファに座った。

「お前も座れよ。聞きたいんだろ色々。なら飯食べながら話そうぜ。永くなるだろうから」

風魔はビニール袋から調理済みの焼きそばとお好み焼きをだした。その時、雅也のお腹がなった。

「腹減ってるんだろ。なら座れ。毒とか入ってないから安心しろ」

雅也は食べ物の匂いに誘われてソファーに座った。

「どっちにするか」

「お好み焼き」

風魔はお好み焼きを雅也の前に置く。

「ありがとう」

雅也はボソと言った。

風魔も箸を手に持ち、焼きそばを食べだした。

「んでお前は何を聞きたいんだ」

雅也は箸を置き言う。

「あの男は誰なんだ。アビリティ・オブ・アイって何なんだ。何故お前は消える。以上3つだけだ」

風魔も箸を置きソファーに寄りかかった。

「まあ話は長くなるが耳の穴をよく開いて聞けよ。まずあの男だが、あいつは黒の騎士団の一味だろう。黒の騎士団ブラック・ナイツとはな、殺しなど恐れられない悪の集団って言えば早いかもしれん。多分お前が狙われたのは目を奪いに来たのだろな」

雅也は目を閉じた。

屍の山・赤い血・刀。

雅也は目を開けた。

「問題になった目。アビリティ・オブ・アイってのどんなものなんだ」

風魔が一呼吸してから言う。

「アビリティ・オブ・アイとは、簡単に言えば特殊な目といえれば良いかな。この前俺がお前の心を読んだだろ。これが俺の目の力アビリティ・オブ・アイを持ちし者、千里眼だ」

雅也は驚くように言う。

「千里眼だって。あれは架空のものじゃないのか」

風魔は頭をぽりぽりとかきながらため息をついた。

「じゃこの前の心を読んだってのは、俺が適当に言ったとでも言いたいのか」

「うっそれは・・・わたった信じるよ。じゃ俺にも千里眼が使えるのか？」

風魔はグラスンをとった。

「お前この瞳の色が何色かわかるか？」

雅也は風魔の目をよく見た。

「黒だろ？」

「と思うだろ」

風魔は立ち上がり、ポケットに入れていた鏡を雅也に渡した。

「その鏡で俺を見てみる」

雅也は風魔の隣に行き、鏡を通して風魔を見た。

「これは・・・黒じゃない・・・透明だ。ありえないだろ」

「そうだ。これが俺の本当の目だ」

雅也は血の気が引いた。

「お前も自分の目を見てみるよ。そしたら、狙われた理由がわかるからよ」

雅也はドキドキしながら目を閉じ、鏡を自分の前にやる。

ゆっくり目を開けると、雅也の瞳は右目が青く透き通った色。左目はまだよく判別できない色だった。

「それがお前の本当の目だ」

「これが俺の目・・・でもなんでこの鏡だったら本当の目が見れるんだ？」

「それはこの世代の代物じゃないからだ」

雅也は一瞬戸惑った。

「もしかしてタイムワープしてきたのか？」

「ちよつと違うな。俺はある人にこちらの世界に送られてきたんだ」

「それもアビリティ・オブ・アイか？」

「ああそうだ」

雅也はちょっと嬉しかった。

退屈だった日常が変わる。まるでゲームの世界だ。

「話は戻るが目にも種類がある」

「種類？」

「良い反応だ。まず俺みたいに色が無い目を水晶の目と言われている」

「まあそんな感じだな」

風魔はわざと咳き込んだ。

「次にお前みたいな蒼い目を空の目と言われている。まあ他にも色々な種類があるけどな」

雅也はにこと初めて今日笑った。

「へえそうなんだ。それで話が変わるが何故お前は消えれるんだ」

風魔は左手につけた指輪を見た。

「この指輪で俺は消えれるんだ」

風魔の指輪は緑色に輝いている。

だが風魔は嬉しそうな顔は無く、暗い顔だった。

「この指輪は何故消えれる能力を持っているんだ？」

「この指輪は簡単に言えば目の力を指輪に写したものだ」

雅也は驚くように言う。

「目の力って・・・風魔殺したのか？」

風魔はため息をつく

「俺じゃねえよ。ただその指輪は俺の親友の欠片なんだよ」

風魔はそっぽを向いた。

「もう良いだろ。消える理由もいったんだからよ。それでだ。お前

はこっちの世界にいたらまた他の人たちが巻き沿いになる。だから俺たちはお前を保護しにきた。だからこっちの世界に来い。これは

命令だ」

「ああそのつもりだ」

雅也は嬉しさ半分、寂しさ半分だった。

「今日の0時にこの町にある正門神社の鳥居に来い。1分だけ俺た

ちの世界につながる道が開かれる。以上だ」

風魔はまた風のように消えていった。

「なんなんだよ。あの風魔！……！！！」

雅也は風魔がいきなり消えたことに腹を立ててしまった。

「まあしょうがないんだよな……俺がみんなを殺してしまったんだから……」

雅也は冷えかけたお好み焼きを食べ、ポケットに入れていた携帯でアラームを設定し、ソファーに寝転んだ。そして眠った。

第3話 決断と世界

「愛せてますか？聞こえますか？この声がー」

雅也は携帯のアラームで目が覚めた。

時刻は午後11時。

ここから鳥居までは30分つてとこだ。

雅也はぐつと背伸びをすると、机の上に置いていた携帯と財布をポケットに入れこの場所を後にした。

雅也は嬉しさ半分寂しさ半分の気持ちで鳥居に向かっていった。

この目でどんな世界が開かれるかわからない。

でも行つて見たいこの世界じゃない所へ。

だがこの街にも愛嬌がある。

そんなこんな考えているうちに目的地の鳥居に着いた。

「あっお母さんにメールしとかないと」

雅也はお母さんとの2人暮らしだ。

お父さんは離婚していない、かと言ってお母さんは働かない。体が

弱いわけじゃない。ただ家で寝ているだけ。怠け者だ。

暮らしは雅也のバイトのお金で成り立っている。

ーお母さんへ

僕は消えます

探さないで下さい

雅也ー

「送信つと」

雅也は携帯を閉じ、ポケットの中に入れた。

何処かで風の音が聞こえた。

雅也は目を閉じると

「風魔」

「よくわかったな」

さつき合ったよりは機嫌がよくなっていた。

風魔は時計を見てこういった。

「今は11時50分だ。あと10分で扉が開かれるがその前に言つとくことがある。あつちの世界はほとんどの奴が、目の力を持ちし者だ。^{アイ}間違つても喧嘩とか売るなよ。俺はお前を保護しに来たんだから・・・」

「わかつてるよ。俺は喧嘩はしないからさ」

「なら大丈夫だな」

風魔は時計を見ると

後30秒

10、9、8・・・3、2、1

鳥居の中に歪んだ光が現れた。

「入るぞ」

風魔が先に入つていった。

「待てよ」

後を追うように雅也がはいていった。

この後雅也の住んでいた世界は黒の騎士団^{ブラック・ナイツ}の手によって破滅した。その事を雅也が知るのはいつとき後の事だった・・・

第4話 未来都市と花蓮

雅也は鳥居の中を潜り風魔の後を追った。

鳥居の中の歪んだ光を抜けるとそこには・・・未来都市!?

「ここが俺の住んでいる世界だ」と、風魔が言った。

雅也は見た光景は、雅也がいた世界より発展してる国だった。

ビルは当たり前、いったい何本立ってるのだろうと思わせる数だった。

それに車が見たことない車になっている。

運転手寝てるよ・・・

「これが風魔の世界・・・」

雅也は予想と違ってちょっと驚いていた。

雅也の創造の世界は、村や城などがあるイメージだったらしい。

「おい行くぞ」

タイルに足を付けると一瞬で一番でかいビルの前に移った。

「すげー」

風魔は一番でかいビルの中に入っていた。

ビル内は今までに見たことのない機械が並んでいた。

風魔と雅也はエレベーターに乗り、最上階に行った。

「この世界にもエレベーターはあるんだな」

「ああ」

風魔の顔には笑みがなく、ピリツとした感じだった。

「今から合う人には礼儀正しくしろよ。間違っても変な事言つなよ。」

エレベーターは最上階に到着した。

エレベーターを降りると、黒い服を着たボディーガードみたいな人が何百人という数が並んでいる。

皆グラサンをかけてる。

「どうぞこちらへ」

一人のボディーガードの人が招待してくれた。
長いレッドカーペットを渡っていくと机に座って寝ている女の人
がいた。

「花蓮様。風魔第2隊長が任務を終えて帰って参りました」

雅也はおかしなところにきずいた。

「隊長!？」

その声で机で寝ていた花蓮が起きてしまった。

「馬鹿。礼儀ただしくしろっていったらどうが」

机の椅子が引きずられる音がした。

「おはよう。風魔さん」

にこっと笑った花蓮の顔には誰にでもわかる殺気がこもっていた。

「おはようございます。花蓮様」

風魔が片ひざをついて言った。

「そちらが任務の品ですか？もしそうだったらウザいから殺します
よ」

また笑みを零しながら花蓮は言った。

「すみません、花蓮様。許していただけませんか？」

花蓮は机の横においてあったボールペンを持つと

「そうですね、私はこのボールペン1つで戦います。勝てれば許し
ましょう。負ければ殺します。どうですか風魔」

風魔はグラサンをとると

「わかりました。受けてたちます」

花蓮は鼻で笑うと

「風魔が私と戦うのではなくその馬鹿が私とやるのです」

風魔は花蓮の事をよく知っている。

幼なじみなのだ。

花蓮が暴言を吐く時は切れているときだと知っている。

おまけに花蓮の能力はあれだ。

このままじゃ雅也が死ぬ。

「まっってください。この雅也はまだ能力が使えません。だから私が戦います」

花蓮はニコツと笑うと

「私の眠りを妨げた馬鹿にはお仕置が必要です。風魔この後何か言って見なさい。あなたもただじゃおきませんよ」

風魔はため息をつくと

「わかりました。雅也自分が犯したミスだ。まあ死なないように頑張れ」

風魔は後ろに下がり、雅也を前に押した。

「さてここじゃ私の大事なものが馬鹿に汚されそうなので場所を移します」

花蓮は指でパチンと音を鳴らした。

そのとたん場所が変わった。

いや正確には飛ばされたんだみんながこの場所に・・・

第5話 花蓮VS雅也

花蓮によって移された場所は体育館みたいなところだ。

「ここなら思いっきり出来るでしょ。さて能力は使えないみたいだから少し手加減してあげましょう。私はここから動かないで戦いましょう」

雅也はこの人がすごい事はさっきの移動でわかる。

多分負ければ本当に死ぬかもしれない。

そうだと勝たなければ・・・

「俺には何も武器はないのか？」

「武器ならありますよ。そこの武器庫からとって良いですよ。待ちますから」

花蓮は座り込んだ。

その間に雅也は体育館みたいなこの場所の端にある、かなり設備が整った武器庫の所へ向かう。

「おつ剣だ。太刀もあるぞ。斧も槍も弓も変なものまであるよ。なら俺は剣にしようかな」

雅也は飾り気がまったく無い、いかにも剣ですよってなものを選んだ。

「決まったようね」

座っていた花蓮は立ち上がりボールペンを右手に持った。

「じゃはじめます」

花蓮はボールペンをカチカチと鳴らしている。

雅也はゆっくり歩きながら花蓮の方に向かっていく。

「走れよ、雅也」

遠く離れた場所で風魔が叫んだ。

花蓮は風魔のほうを向き言った。

「風魔さっき言った事をお忘れ？」

風魔は頭を下げながら

「すみません」

といった。

雅也は風魔が頭を下げたとたん花蓮のところに猛スピードで走り出した。

「不意打ちですか。でも・・・」

雅也は剣を花蓮に向かって振り下ろした。

だが花蓮のボールペンで塞がれた、あげくの果てに雅也は吹き飛ばされた。

「この剣ってちゃんと切れるのか？」

「ええ切れますよ。骨まで真二つにするほどの切れ味ですよ」

「じゃあ何でボールペンでふさがれるんだよ！！！」

「ふふ内緒」

ニコと微笑えんだ。

「くそアビリティ・オブ・アイか・・・」

花蓮は何も答えない。

ただ笑っているだけ。

「後、しょうもない心理戦はしないほうがいいですよ。ばればれですから・・・作戦を考えたのは認めますよ」

「ちえばれてたか」

「頭はよいみたいです」

「ああ頭も運動神経も顔も良いよ」

苦笑いしながら雅也は言った。

「自画自賛ですか。面白い人ですね」

雅也は作戦を考えていた。

（花蓮からボールペンをとる方法・・・無いな・・・やっぱり死ぬ

のかな・・・まだ諦めないで攻撃してみるか・・・)

雅也はまた走って花蓮に剣を振り回した。

だが花蓮に傷をつけるどころか、何回も吹き飛ばされ逆に怪我をしていた。

(やべえよこの人強すぎる・・・怖い・・・怖いよ)

「私も攻撃して良いですかお馬鹿さん？」

笑った花蓮の笑みには殺気もこもっているのを雅也はわかった。

花蓮はボールペンの先っぽの部分を回して取り外した。

「頑張って避けてね」

花蓮は雅也に向けてボールペンの一部を投げつけた。

ものすごい速さだ。

やっと見えるか見えないかくらいの早さだった。

雅也はしゃがみ込み難事を避ける事ができた。

「あら、避けるのお上手」

雅也の額からは冷や汗が零れていた。

「それくらったら死ぬよな？」

雅也は問いかけた。

「今では骨が折れるくらいですかね。今から投げるやつは貫通させる威力ですからきよつけてくださいね。確実に死にますよ」

花蓮の笑みを見るのが怖くなってきた。

(次で決まる・・・あのボールペンが無くなれば防げるものも無い・・・多分ボールペンを投げるだろう・・・ここは命を賭けるか・・・もしかしたら死ぬかもしれないんだから・・・)

「それ」

花蓮はボールペンを投げつけてきた。

さっきとは比べ物にならない速さだ。

雅也は剣を心臓に近い部分に構えボールペンを防ごうとした。ボールペンが雅也の剣に当たった。

「ぐっ」

雅也は思わず声を上げてしまった。

まだボールペンは剣を押している。

剣は悲鳴を上げていた。

（クソ、ヒビが入ってきやがった。避けるか）

雅也は体を捻り、ボールペンを避けようとした。

だがボールペンの威力は半端なく、左肩を貫いて壁にめり込んだ。

「あら避けてしまったの・・・残念」

雅也は急いで服を破り、左肩に巻き、血を止めようとした。

「俺の勝ちだな」

雅也は鼻で笑った。

「あらそれはどうでしょう？あなた左肩の神経とか切れてるからもう剣も持てないわよ。それにその血じゃもうもたないわよ」

雅也は落ちた剣を持つとした。

だが力が入らない。

「あなた左利きみたいだし。もう私には勝てないわ」

「でももう武器は無い。だから俺は死なない」

花蓮の口がニヤついた。

「それは残念。これ何かわかりますか？ボールペンの中に入っているインクの部分ですよ」

（嘘だろ・・・あれ投げられたら俺死ぬぞ・・・左手が使えない今・・・どうすれば・・・）

「残念でしたね。武器つてのは最後まで取っとくものなんですよ。

あなたはやっぱりただの馬鹿でしたね」

花蓮はボールペンのインクの部分を雅也に投げつけた。

雅也は剣も握れず、音も無く倒れこんだ。

「風魔、この子を治療室へ・・・」

第6話 破滅と誕生

雅也は暗い世界にいた。

この世界には何度か来た事はある。

そう夢の入り口だ。

雅也は辺りを見回した。

見回してみると一つの石が落ちていた。

青く透き通った輝く石だった。

「この色見た事があるぞ・・・そうだ俺の右目の色だ」

雅也はその石を触るとなんだが声にならないエネルギーが流れてくるようだった。

石を触っていると、石は色を失って灰色のただの石になってしまった。

「あれ、色がなくなっただぞ」

石は跡形も無く崩れ落ちる。

その代わりに雅也の目に異変が置き始めた。

「うつ目が・・・痛い。手も足も・・・体全体が熱いし痛い」

あまりの痛さで、ベッドの上に寝ていた雅也は飛び上がるように起きた。

隣には風魔がいた。

「おはよう雅也」

風魔の笑った笑みには毎回寒気が走るほどだった。

「お前うなされていたぞ」

雅也は目を擦りながら腰を上げる。

「ああ夢で体全身が痛くなっただんだ」

「また変な夢を・・・それより、よかったな花蓮に殺されなくてよ」

雅也はボールペンに貫通された左肩の傷が治っていることにきずいた。

「殺されていない・・・おまけに直っている左肩が・・・でも俺は負けたんだよな、なら殺されるんじゃないかなかったのか？」

風魔は右手に持っていた筒を雅也に渡した。

「花蓮からだ。読んでみる」

風魔の顔には優しい笑みが流れていた。

――新芽^{しんめ} 雅也^{まさや} 様

あなたを『風魔第2部隊』に入団させることになりました。

なおあなたに否定する権利もありません

だって私に負けたんですからね――

「よかったな雅也。お前は俺の部下になったんだ」

「ちよつと待てよ。話がいきなりすぎるだろ・・・」

「ああちよつと大変な事になったからな、さつき決まった事なんだ」

雅也は思わず聞いた。

「大変な事？」

風魔はため息をつくとき雅也だけに聞こえる声で言った。

「お前の住んでいた世界が黒の騎士団によって破滅した」

「えっ嘘だろ・・・」

「嘘じゃ無い、本当だ」

雅也はショックを隠せなかった。

あまり良い世界だったとはいえなかったが、自分が生まれた場所の世界がなくなつたのだ。

「でも何で?!」

雅也は風魔につつかみかけるように言った。

「まだそことは不明だ。今、華蓮たちが調べている途中だ。だがここの場所も狙われるのも時間の問題だ。そこでだ、急遽部隊の強化および増員する事になった」

「それで俺が入る事に・・・」

「ああそうだ」

雅也はベットの布団に潜り込んだ。

「もう少し時間をくれよ風魔。自分がわからないんだ。意味不明の目に、意味不明の世界、意味不明の滅亡、こんなのいきなり来てもわからないんだ」

布団は団子のように丸くなった。

「ああ別にかまわんが、これは生きるか死ぬかの時間を削る意味ってことを忘れるなよ」

風魔は風のように消えず、ゆっくり病室から出て行った。

雅也は布団の中で考えていた。

「俺は人間か？ああ多分人間だ。この世界は本物か？ああ本物だ。この目は本物か？ああちゃんと見えるから本物の目だ」

雅也はパニックになった時、自問自答をする癖がある。

「ならこの目は本当にアビリティ・オブ・アイなのか？それはわからない。なら本当に前いた世界は破滅したのか？それもわからない。なら俺はどうすればこの問題を解けるんだ？聞く？調べる？そうだ誰にだ？風魔とか花蓮？。そうだ解決の手口はある。なら答えは出た」

雅也は布団をバツと放り投げ病室を後にした。

第7話 目の原理と尋ね人

雅也は扉を出て行くと、『通告』のマークがコンピューター画像で雅也の前に映し出された。

『通告、風魔第2隊長に報告いたしますので、少々お待ちください！！！』

聞き取りやすいコンピューター音声だった。

「多分この時代では当たり前なんだな・・・多分音声プログラムとか完璧なんだろう」

雅也は冷静に判断した。

コンピューターの「ピッピー」と言う音が聞こえた。

そうすると今度はコンピューター動画が流れ始めた。

風魔からだった。

「おっ自分の気持ちに決断がでたんだな。まあちょっと待っとけ、すぐに行くからよ」

雅也は深呼吸するところだった。

「風魔お前にも用はあるが、あの華蓮にも聞きたい事があるんだが・

・・」

コンピューター動画は跡形も無く消えた。

「そりゃ難しいお願いだな」

隣にはもう風魔がいた。

「相変わらず早いな」

雅也は風魔の目も見ずに言う。

「まあな。それより俺が花蓮に聞きたい事の返事したら駄目なのか？」

雅也は自分の右目を片手で押さえて言った。

「この目についてもっと詳しく聞きたい。それと今後の事も」

風魔はいきなり、「コンピューターシステム・オン」といった。

風魔の前にさっき雅也が見たコンピューターが現れた。

「開いている会議室および訓練室はあるか？」

コンピューター音声が『あります。案内します』

そうゆくと、赤いレーザーが現われる。

「よし、このレーザーについていけば、着くぞ」

風魔はレーザーに沿って歩き出した。

風魔と歩いてると、色んな人を目にした。

白衣を着た人や全身黒い服をきたボディーガードみたいな人や変わった服を着た人などいた。

「なあ風魔・・・」

雅也が話しかけようとすると、風魔はボソッと「後で話せ、今はしゃべるな」といった。

しょうがなく雅也は黙り込んだ。

黙ったまま5分ほど歩いた。

赤いレーザーが扉の前で途切れた。

コンピューターの音声聞こえる。

『案内を終了します』

風魔は扉の横にある暗証番号を押した。

『確認完了。どうぞお入りください』

扉は自動に開きます。

「いくぞ」

風魔は中に入っていった。

部屋の中は椅子が3つあるだけだった。

「何もないな・・・」

雅也はボソツと言った。

「まあ今のところはな」

風魔は何か隠しているような笑い顔だ。

「つで何から聞きたい？」

風魔は椅子に座りながら聞いた。

雅也は椅子に座ると、風魔の目を見て言った。

「まずはこの目についてだ」

雅也の右目はもう完全な薄い青い色に変わっていた。

「この前は、色の種類まで話したかな？」

「ああそうだ」

「そうだな・・・はあ面倒だな・・・コンピューターシステム・オン」

風魔はコンピューターシステムを開いた。

「用件はなんでしょう？」

「アビリティ・オブ・アイについてその雅也に説明してくれ」

「はい、了解いたしました」

コンピューターシステムは風魔の前から雅也の前に移った。

「何がきいたいでしょうか？」

風魔は椅子からいなくなっていた。

「風魔また逃げたな。はあしょうがないや。ならまずは、この目の原理を教えてください」

コンピューターは目の図を雅也に見せた。

「まず目は物を見るものです。物を見るのは大切な事です。生き物

で心臓の次に大切な部品でしょう。そこである発展が起きました。

最初にアビリティ・オブ・アイが見つかったのは、300年くらいのヨーロッパ地方で発見されました。まだその時は、視力がかなり良くなる事や幽霊が見えるなどの、低レベルのものでした。そして月日が流れて1000年くらいになつたくらいに、火や水、風、などの付属眼ふぞくがんが出てきました。それで・・・」

「まった、付属眼つて何だ？」

『今話しても良いのですが、原理を教えた後のほうが良いと思いますが・・・』

「なら後で頼む」

『かしこまりました。話は戻りますが、火や水などの付属眼が出てきたらへんで、ある研究が行われました。それは、目の能力の吸引です。』

「何で吸引を？」

『理由は、科学者たちの仮説は目の中は特別な液体で、その液体がある反応を起こし、火や水を操れると思ったのです。だけど、それは、失敗に終わりました。本当は目の中には宝石のような物が入っている事が判明しました。その宝石が主の血と共鳴反応を起こし能力が出たというわけでございます』

「目の中に宝石・・・か」

『こちらの世界では、ハート・ジュエル真実の宝石といわれています』

雅也は不意に思い出した。

風魔のことだ。

（あの緑の指輪・・・あれはもしかすると、ハート・ジュエル真実の宝石なのか）

コンピューター音声はさらにしゃべりだした。

『そして、ここ200年間では、特殊眼とくしゅがんや双獲眼そうえんがんや黒魔眼くろまがんなどが見つかри始めました。これは時代の進化というやつでしょう。最後にまとめるとアビリティ・オブ・アイは人間の進化によって作られた目といえは簡単でしょう。以上で説明を終了します』

雅也は深く悩んだ。

まだ謎だらけだからだ。

（何故人間は進化をしてまでアビリティ・オブ・アイを手に入れたかったのか。）

まだまだ謎が残るものばっかだった。

「気になる事は全部聞いたか？」

風魔の声だ。

雅也は振り返った。

そこにはもちろん風魔がいた。

だが他にも見たことのない人も3人いた。

3人とも目の色が違う・・・アビリティ・オブ・アイだ。

第8話 能力と音

風魔は椅子に座った。

「お前さっき、目の原理について聞いていたんだろ？」

雅也は首を縦に振る。

声には出さなかった。

「お前、目の種類も聞いたか？」

雅也はまた首を縦に振る。

「ならその目の能力を今からみしてやるよ」

雅也はワクワクしながら風魔の話を聞いた。

「まずはネリアン・ジン・ホープからだ。こいつの目の種類は付属眼だ」

横3人並んでいた人の左の人が前に出てきた。

髪の毛が黄金のように輝いている。

身長も高く、いかにもパリジェンヌって感じた。

目の色は・・・黒？

「どうも始めまして、ネリアン・ジン・ホープです。名前が長いのでジンと読んでください」

どうやらこのジンってゆう人は女の人だったらしい。

たくましく、真面目そうな人だ。

雅也はどっちの性かちょっと迷っていた。

だがこれではつきりした。

「風魔なんでジンさんは目が黒いんだ？」

そう雅也が聞いたとき、後ろ2人いたうちの一人が雅也のほうに

近づき胸ぐらを掴んだ。

「おい貴様誰に向かって話してるんだ？」

男は切れているようだった。

雅也は冷静沈着に言った。

「そこにいる風魔にだよ」

男の額には血管が浮かび上がっていた。

前にもあったような風景だ。

「次、隊長にタメ口聞いてみる、俺が裁いてやるよ」

男は胸ぐらを離し元にいた位置に戻った。

風魔はのどを鳴らした。

「おい、ジャロック勝手な行動は許さんぞ」

雅也の胸ぐらを掴んだ奴はジャロックという奴らしい。

坊主に剃り込みを入れた頭。

短気そうだ。

目の色は・・・また黒？！

「すみません。風魔隊長」

ジャロックが謝った。

「わかればいい。後、雅也、目が黒いのはコンタクトを着用させているからだ。特に意味は無い。それではジンお前の能力を雅也にみしてやれ」

ジンが雅也の近くに行き、手を前に出した。

すると、青い火花が舞い出した。

「これは、付属眼の一種の『青炎しえんの目』です」

青い火花はまるで宙に舞う花火のようだった。

ジンが左手を握ると火花は激しい音と共に爆発した。

「これが私の能力です。つまり、付属眼とは風、炎、水、氷などの属性を操れる目というわけです」

雅也は思った。こうゆうのも真実の宝石ハート・ジュエルで動いているのかと。

風魔が言った。

「次のジャロックが双獲眼だ。ジャロック説明して、力をみしてやれ」

ジャロックが前に出るとジンは後退した。

「双獲眼の力を持つジャロックだ。双獲眼は目の能力と目の能力を融合させて使うものをいう。以上だ」

ジャロックは腰ポケットに手をつ込み指輪くらいの大きさのシルバーリングを出した。

肉眼でやっとみえるくらいの糸がくくりつけられてるのが雅也にはわかった。

ジャロックはシルバーリングをぐるぐる回しだした。

「これが俺の能力だ」

すると、電気のようなものが、糸を伝わっていき、リングに電気が当たると、リンクの輪から黒く硬そうな物質が棘のように出てきた。

「うらあ」

ジャロックはシルバーリングをさらに振り回しだした。

ジャロック以外の人は端っこに避ける。

雅也も小走りで隅に逃げる。

「これが、俺様の『電透裂槌』ライジング・ハンマーだ。」

ジャロックは電透裂槌を振り回し、壁に当たるとなんと、壁がえぐれていた。

「おい、ジャロックそのくらいで終われ」

風魔が命令をした。

その時、電透裂槌がジャロックの手から抜けた。

その抜けた先には雅也がいた。

「うわあ、しまった」

ジャロックは嘆いた。

その時、指をパチパチ鳴らす音が聞こえる。

『おと まも音の守り声』

どこからもなく、とてもきれいな声が聞こえた。

だがその事よりもジャロツクの電透裂槌が雅也に向かっている。

もうあと2メートルくらいのところで電透裂槌は見えない壁にぶつかり止った。

雅也は腰が抜けてしまった。

「こら！！ジャロツク」

風魔の怒声が聞こえる。

ジャロツクの電透裂槌はただのシルバーリングに変わった。

「大丈夫ですか？」

ジンが雅也に近づく。

「今のは何なんだ・・・」

ジンは隅に立っていたまだ紹介されてない人を指を指した。

「彼女の能力で助かったんですよ。彼女の守りの技の『音の守り声』です。彼女はあまりしゃべれないので私が紹介させてもらいます。」

彼女は雅也さんと同じ異世界から来た人なんですよ。彼女は紅虹鈴ベニにじりんあなたと同じ日本の出身です。4年前にこちらにきました。目の能力は特殊眼です」

虹鈴は白いフードを被り、ロングスカートを穿いていた。

首にはきれいな宝石の首飾りが身に付いていた。

「おい、皆聞け」

風魔の声が聞こえた。

「今から本格的な話に戻るから、椅子に座ってくれ」

風魔の隣には暗く落ち込んだジャロツクの姿が見える。

『コンピューターシステム・オン』

風魔が言った。

「椅子をもう2個出してくれ」

『かしこまりました』

床から椅子が生えてきた。

雅也はちよつと感動した。

風魔がさっきいつていた秘密は多分このことを言いたかったのだろつ。

皆が椅子に座ると風魔はしゃべりだす。

「これよりお前たちと俺でこの雅也を鍛える事になった」

ジャロックは反応した。

「俺がこの餓鬼の教育をするのですか・・・？」

ジャロックが風魔に聞いた。

「ああそうだ。お前に文句は言わせないぞ。さっきの件と良い問題だらけだからな。期間は2週間。目の能力の開放、及び操り方を教えてやれ」

ジンと虹鈴は立ち上がり、右手を左胸に手を当てた。

どうやらこの行動は了解という意味らしい。

遅れてジャロックもその行動をとった。

「ならこれで終わりだな。今日はもう遅いから明日から開始だ。場所はこちらでやって良い。あと何かあったらすぐに連絡をくれ。以上だ」

風魔はまた風のように消えた。

「それでは、私たちも戻りますかね」

ジンが笑ってゆった。

ジャロックと虹鈴はうなずいて出て行った。

「雅也君は今日はここに泊まってください。コンピュータシステム・オン。ベットと机と椅子を出してください」

ベットと机と椅子が出てきた。

「あと何かいるものはある？」

ジンは聞いた。

「コンピュータシステムを貸してもらえませんか？」

ジンはうなずいた。

「一時的に雅也君に起動許可をお願いします」
『了解』

「これで使えるわよ。使い方はわかるよね？」

「はい」

「それじゃお休み」

ジンも外に出て行った。

雅也はコンピュータシステムでいろいろな調べ物を始めた。
そして、夜遅くに眠りに着いたのであった。

第9話 我流と黒

―黒の騎士団本部―

「作戦の内容は把握できたか？」

低い声がホールに響き渡った。

「第弐騎士隊が今から偵察がてら、あの華蓮がいるタワーを破壊して来い。そして、目新しい能力を持ったものがいたら、そいつを生け捕りにして来い。あれを完成させるためだ」

そう言つと低い声の者は扉から出て行つた。

周りにいた者も何も言わず解散した。

―雅也の寢床の場所―

「おはようございます」

明るい声が響き渡った。

その声はジンだ。

雅也は布団の中に包まっていた。

ジンは布団をひっくり返す。

雅也はベットから落ち、目を覚ました。

「うつつ何だよ。まだ朝じゃないだろ・・・」

扉からジャロックと虹鈴も入ってきた。

「やる事はいっぱいあるんです。でも時間がないんです。だから朝早くからします。」

ジンは嬉しそうだった。

ジャロックはニヤニヤしているし、虹鈴は無表情だった。

「さっ着替えてください。ご飯は用意しときましたから」

ジンはテーブルにご飯を並べ始めたのだが、雅也は驚いた。ご飯の色といい、形といい、匂いといい最悪だ。これは・・・そうたとえるなら、紫色に輝くナメクジの色とおからの塊のような形と60歳くらいの親父の頭皮の匂いが混ざってしまったような感じだ。

「こ、これは・・・なんですか？」

ジンはにっこりするとこう言った。

「これは、サラダとトーストとハムエッグですよ。美味しそうですよ」

ジンにはどんな世界が見えているのだろうか？

雅也はそう思った。

その時ジャロックが隣に来てこっそりと言った。

「ジンは神だぜ。あれが旨いと思っている。多分この第二部隊で一番料理が下手だぜ。後全部食べるまで見てるぜあいつは」

本当に神だ、そして鬼だ。もうそうしかいえない。

雅也は思い切って一口目を口に入れた。

雅也は初めて死ぬかと思う味を味わった。

ジンはにっこり笑っている。

なんだこんだで雅也は食べ終わった。

「ごちそうさま・・・」

声のトーンはがっくり落ちていた。

「はい、よく食べました」

ジンはそういった。

ジャロックも馬鹿にするように、隣でこそつと言った。

雅也は着替え終わると、修行の説明が始まる。

「えーっとでは修行を始めますが、雅也さんは能力をだせますか？」

「この前この世界に来た人が出せると思いますか」

雅也はさっきの恨みをこめて嫌味を言う。

「そうですね。まあ出し方は人それぞれなんですよね。私の場合は、空気中にシャボン玉を出すような感じでやると能力を出す事ができました。ジャロックさんは？」

ジャロックはのどを鳴らすと

「俺の場合は、自分の気を糸のように出すような感じだな」

どれも、あやふやなものばかりだった。

「まあ簡単に言えば我流ですよ」

ジンは笑って誤魔化した。

「頑張ってくださいねつと言いたいのですが、時間はあまりないので、実戦を交えてやらせてもらいます。なら最初は私がしましょう。この後はジャロックさん、虹鈴さんの順で行きましょう。『コンピーターシステム・オン』」

ジンの前にコンピーターシステムが現れた。

「今からちよつと実戦したいから場所を出してくれる？」

『かしこまりました』

さっきまでは、机と椅子とかしが無かった場所が、広々とした殺風景の場所になった。

「ありがとう。それでは準備はいいかしら？」

「ちよつと、待った」

雅也はそう言った。

「この実戦の意味は？」

ジンは髪の毛をなびかせると

「この実戦の意味は、まず一番最初に能力の解放です。能力が出せない、この弱肉強食の世界では生きていきません。一番目を実戦の勘を身に付けてもらいます。それが今回の目的です」

「武器はないんですか？」

「武器はまず基礎を身につけてからです」

「わかりました。なら、早くやりましょう」

雅也の顔にはちょぴり笑みが凝れはじめていた。

そして、この後とんでもない事が起きた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7910e/>

目に見えぬ世界の少年

2010年10月10日09時29分発行